

# 神道論の試み

## 目次

はじめに	2
社寺叢林に坐る	2
日本語の語る神	3
それぞれの神道	7
神の道と佛の道	8
あのすなおな心	10
神の言葉を聴く	12

## はじめに

神道と聞けば、人はそれぞれに何かが思いがうかぶだろう。歴史的にも紆余曲折を経てきた。

ここではひとまずそれを置いて、私の経験と日本語そのものから改めて神と神道を定義したい。

結論を言えば、日本神道とは、日本語をとおして古来よりいまに伝わる、人が神と語り生きざる道である。

拡大を旨とする資本主義が終焉に向かう段階になって、世界各地に排外主義的極右民族主義がひろがっている。そのなかで、唯一国家権力をにぎるのがこの日本列島の政治である。

それを主導しているのが、かつての国家神道の時代への回帰を掲げる潮流である。その国家神道は、後に示すように、日本神道とは真逆のものである。

そして日本神道は、資本主義の次の時代をきり拓き耕してゆこうとするものの深い智慧でもある。この智慧を、日本語のうちに読みとり神のことを聴きとらねばならない。これはそのための試論である。

## 社寺叢林に坐る

私は茶所の宇治に生まれた。小学校低学年前後に住んでいた宇治川べりの家の近くには、現存する日本最古の木造建築である宇治上神社が小高い山の麓にあった。そ

の側にある桐原の泉といわれる湧水の建屋も古く、そこに座り込んで風に揺れる草木を見つめていた。その後、引越したところには縣（あがた）神社があった。六月五日は奇祭といわれる縣祭である。真夜中に街道筋の明かりを消して、梵天のお渡りがある。家を開放し大阪から来た人らを泊める。お宿といっていた。母が鯖鮓を作る。かつてこの日は小学校も午前中で終わりだった。

家には小さい神棚があった。何が祭られていたのかわからない。大晦日に父が神棚に灯明をともし、翌日の別の世界の別の時間の始まりが用意される。その灯明のろうそくの光の静かな揺らぎが、違う世界を示していた。その頃、まだ土間には竈（かまど）があった。ここにも小さな門松をかけ、十二の餅といていたが、小餅を十二個、二列に並べてひとつにしたものを鏡餅として祭った。おそらくは年占いのなごりなのだろう。

京都では如意ヶ嶽、いわゆる大文字山の麓の北白川に下宿した。ここは白川女の里であり、北白川天神宮があった。考えごとのあるときはいつも、石段を登り境内にある社の前に腰をおろした。大学をやめ京都を出ることを決めたのも、ここでのことであつた。そしてまた、大学の横の吉田山には吉田神社があった。室町時代から続く節分の縁日には夜店が並ぶ。多くの摂社や末社もあり、歩きまわった。八角形の奇妙な建物も印象深い。

働いてからは、西宮に住んだ。はじめに住んだところ

は西宮えびす神社の近くであった。産業道路と鉄道には  
さまれたところにあるが、まわりは深い木々に囲まれて  
いる。それから引越し、広田神社の地元に住んだ。宮  
参りにも行かせてもらった。さらに北へ引越してから  
は、もう四半世紀以上、甕(こしき)岩といわれる巨岩の  
磐座(いわくら)をご神体とする越木岩神社が地元の神  
社であり、左翼活動に打ち込んでいた時代も含めて、初  
参りもどんど焼ぎに参るのも毎年欠かさず続けている。

越木岩神社を取りまく雑木林は、原生林である。冬も  
葉を落とさない常緑の林である。巨岩を囲む雑木林のな  
かに社を置き、その自然を守り、その力への畏怖をいだ  
き、身近なものの安寧、世の平安を願って手をあわせる。  
この地で、営々と人は祈り、拓き耕し生活し、命をつな  
いできた。

このように、磐座や川や山などその地にある固有のも  
のをご神体とし、それをかこむ鎮守の森や社叢とともに、  
その地の協働体の中心にすえて、人々は力をあわせて生  
きてきた。森のなかの空間に人が来て坐り、あるいは海  
の見える洞窟に坐り、心を放って自然とそれを超えたも  
のを感じとり、またそのことを聴く。人が人として生き  
るうえでなくてはならない場であった。

琉球の御嶽(うたき)もまた同じ意味の場であろうが、  
琉球語と日本語は関連深いがしかしまた別の言葉である  
ので、ここでは置いておく。

私は近年、日本語の再定義という問題に導かれて、本  
居宣長や平田篤胤も読んできたが、神道の教義としてそ  
れを読んだのではない。私にとって、そして神社に参る多  
くの人にとって、神道は、神とその教えを信じるというよ  
りは、神社によって守られてきた風土とそれに根ざした  
生活を受けとめ、われわれの生の根拠を感じとり、そし  
て祈ることであった。それは一個人のことではなく、こ  
のような経験は人々の深い無意識の記憶として蓄えられ、  
言葉の基層で伝えられてきた。

それをふまえて、日本列島弧に住むものは神と神道を  
どのようにとらえてきたのかを、日本語において確認す  
る。そしてそのうえで、このような神社や寺を場とする  
人の行いの意味を考え、自己の経験に照らして、神と神  
道を再定義する。そして、いま神道が語ることを聴きと  
りたい。

## 日本語の語る神

日本語の語る神を考えるにあたり、文字の使い方を一  
つ決めておく。「このこと」といえば「この」が指し示す  
内容を意味するが、「このコト」といえば「この『こと』  
という言葉」の意味である。以下においては、カタカナ  
を、明らかに他言語の固有名の翻訳とわかるるとき以外に、  
「その音が示す言葉」を指示するものとする。ただし、二語

以上のことばや、漢字語、そして文章は、かぎ括弧をもちいる。

また「言葉」とは「ことのは」であり、ことの現れである。よって「言葉」は具体的な単語や文章を指すだけでなく、「彼の話す言葉は日本語である」のようにいわゆる「言語」の意味でも用いる。

さて、「神」を日本語ではどのようにとらえてきたのか。言いかえれば、この言葉のもとに生きてきた人々は、何を「神」と言いあらわしてきたのか。

言葉としてのカミは、大野晋先生があきらかにされたように、タミル語に由来する。その意味は「大きな力をもつ恐ろしい存在」である。この言葉が多くの関連する言葉をともなうて、三千年の昔、水田耕作とともに日本列島に伝わった。

そして、カミなどの言葉が縄文時代からの言葉と混じり合い、混成語として熟成する中で、カミの力はアrika やスミカのカと同じく人の生きる場を意味し、ミはムの名詞化であり、ムはその場をむすぶ、つまりそれを成り立たせることを意味しするようになる。ムスブもまたタミル語に由来し、意味は「完全になる。なしとげられる」である。

このような言葉の混成と熟成が、三千年前から二千五百年前の日本列島でおこなわれていった。こうしてカミは、人の生きる場をむすぶもの、つまりそれを成り立た

せているものとなる。これがカミの基層の意味である。

本居宣長はカミを、「尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳（こと）のありて、可畏き物を迦微とはいうなり」（『古事記伝』一の巻）と定義している。「すぐれたること」のある「かしこきもの」をカミというのである。「かしこき」は先に書いたタミル語本来の意味である。

「かしこきもの」のモノとは何か。この宣長の言葉において大切なことは、モノとコトという言葉が日本語の構造のうちにとどのような位置をもつのかということである。モノもまたタミル語に起源をもつ。タミル語の意味は「世の定めや決まり」である。

世界のすべてはものである。ものほど深く大きいものはない。この世界はものからできている。森羅万象、すべてはものである。これが世界である。ものは存在し、たがいに響きあっている。本居宣長は「すぐれたること」のあるものとして神を定義した。

この宣長の定義では、「すぐれたることのあるもの」として、天皇もまた神たり得る。実際、宣長は「天皇は神である」からさらに「神は天皇である」に至った。

ではほんとうに人は神たり得るのか。それを考えるために、「生きる場をむすぶ」の意味をいまま少し深めよう。そのためにコトを深める。

コトはモノと対になる言葉である。ものはことを内容として生成変転する。人はものの意味を聞きとりことと

してつかむ。人が、ものを、相互に関連する意味あるもののあつまりとしてつかむとき、そのつかんだ内容がことである。

コトもまたタミル語に起源をもち、カタ(型)と同根である。無秩序であったものが意味をもって一つにまとまること、これがコトの原義である。またクチ(口)とも同根である。クチの古形はクツであり、クウ(食う)とツクル(作る)からなる言葉である。クツワ(轡)に残っている。

口に出して言葉にすることによって、無秩序なものがまとまる。言葉にすることによってことが成立する。言いかえれば、言葉にできる根拠がことである。いわれたこと(言)といわれること(事)のさらに根底にあつて、それらを成り立たせている、つまり世界を意味あるものにしていく働きをいう言葉である。コトはモノと対になって、日本語でもっとも基本になる言葉をなし、その意味は深く大きい。

人にとつてこの世界は、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人はこととしてつかむ。コトは、人が自らの諸活動と自らが生きる場所に生起する内容をつかもうとするとき、のべられる言葉である。

山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し、全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人はこのうち

ある。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき体験したことを言葉にする。把握するという行為は、生きた事実から命名された概念への転化であり、直接の出会いから概念としての把握へ転化する。事実としての存在が本質としての存在に転化する。

では、「こととしてつかむ」のはいかなる働きであるのか。人はこの世界のなかでいつとき輝き、そして生を終えてものにかえる。そのいつときを「いのちあるとき」という。いのちあるとき、それを生きるといふ。「生きる」のイキはオキの母音交換形である。オキはオク(起く)の根拠である。ものがおきるのはそれが生きているからである。オキもまたタミル語に起源をもつ。

いのちの根源をイキと表す。これが「生き」と「息」に分かれた。「生きる」はいきがはたらく状態にいてることである。いのちとは、ものともものことと、さらにものがことにしたがってはたらくいきが一つになる場である。いのちをいのちとするこの根元的な働きがいきである。

いのちのイは食べ物のことで、ノの動作形はヌでナ(大地)からものを得ること。つまりイヌは生きるうえでノ糧を得ることを意味し、またその行為がなされる場でもあり、またその行為の主も表す。イヌはイネ(稲)、イノチ(命)、イノリ(祈り)などに共通の不変部である。チは「霊(ち)」とも書かれ、その行為を起こさせる根拠を示している。

いきることの根拠としてはたらき、それがいのちである。いのちはその一つの存在形式である。ものがいきのはたらきにより「こととしてつかまれる」のである。

このように日本語を読んだうえで、私自身の来し方をふまえて「神」を定義する。

人の生きる場をむすぶものとは、ものがいきを根幹にして「もの、こと、いき」の構造において存在するとき、この存在を成り立たせるはたらきをするもののものである。生きものを生きものたらしめる根源的なはたらきをするもの、これが「神」の定義である。

神はさまざまの場ではたらき、八百万神といわれるが、そのはたらきは同じである。つまり、人のいのちを成り立たせるものとしての神であり、その故に人そのものは神ではない。

私たちは、この「いのちの不思議」に出会ったとき、それをなりたたせるものとしての神のはたらきを「すぐれたること」として、実感する。神はかしこきもの、恐ろしいものである。雷（カミナリ）はまさに神の鳴りであり、成りであり、怒れる神であった。そしてこの神にはらへによって穢れをのぞくことを祈り、まつりによって豊穣を祈る。人は心に願うことがかなうように神に祈る。心から祈るとき「すぐれたること」のある神は、その願いをかなえる。人が生きることとは、ものに思いをかけ、そのもののことを考え、願いがかなうように神に

祈り、人生を動かしていくことである。

いのちあるものとしての人は、世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということであり、その場はいのちが響きあい輝くところである。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。人は心から語り協働することである。この世がものよりできていて、この宇宙があり、そして地球があることのものである。さらにそこにいのちが生まれ、人が現れたことのものである。これをむすぶもの、それが神である。

神道とはこのような、神との語りとその人の行いである。これが神道の定義である。行いであるがゆえに「道」なのである。働くものは、いのちのはたらきとして耕し、ものの世界から糧を受けとる。神道とはこの日々の生産活動の不思議への畏怖と、その生産に携わりつつ生きてきた先人の智慧であり、その実践に他ならない。

生産の不思議を聴きとり、語らい、いのちあるもの安寧と五穀の豊穣を、畏怖をもって祈ること、これが神道である。

個々の人間は、言葉を身につけることで、この智慧を受け継ぎ人間としての考える力を獲得し、そして成長する。成長の過程で身につけた言葉は、その人の考える力の土台である。神道とは、言葉に蓄えられてきた智慧を時代の求めに応じてとりだし、明らかにすることそのものである。このように考えるならば、日本神道とは日本

語がその言葉の仕組みをとおして伝える神の道である。

われわれがここで見出した日本神道は、古来よりまに生きる神の道である。そしてそれは、日本列島が一つの国に統一されるよりもはるか昔に、東アジアやまた遠くインドからの人々が行きかうなかで形成され、今日まで営々と受けつがれ、また深く耕されてきた古人の智慧である。そしてそれは日本語の構造を通して今日に伝えられている。

神道という概念そのものは、それほど古いものではない。それだけにここで改めて定義することの意味がある。われわれはこうして、神道を見いだすのである。

七世紀になって統一国家ができたころ、国家統一のためにいわゆる記紀神話という物語が形成される。そして、神のよりしろとしての神社もまたさまざまに再編され、古来よりの御神体にあわせて、物語に由来する新たな神がまつられてゆく。神社を支配体系に組み込もうとする力と、その土地の神をまつる神社との間にさまざまな矛盾もおこり、その関係も世の変化にあわせてさまざまに変化する。しかし、その基底にはやはり今に続く日本神道がある。

## それぞれの神道

このように考えるならば、それぞれの言葉は、その言葉の仕組みを通してこの世界の不思議をとらえる。よって、それぞれの言葉にはそれぞれの神とその神の道たる神道がある。日本神道とは日本語の神道のことである。

聖書のヨハネ福音書の冒頭は

はじめに言葉があつた。言葉は神と共にあつた。言葉は、神であつた。

である。「言葉」は「logos」の訳とされているが、これは「こと」そのものである。西洋語では、ことが先にありそのもともとものが作られる。このようにこの世界をとらえる。ここから出てくる「もの」は物質と精神とに分するときの物質である。

日本語はそれとはまったく異なる。このような二分法ではない。ものは実に広く深い。この深く広いものを日本語は「もの」という一つの言葉でとらえる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

同時に、「はじめにことあり」とする西洋の智慧もまた尊重しよう。それぞれ異なる言葉の構造をもつが、しかしそれぞれの構造を通してこの世界とここで生きる意味をつかんでいるのである。

ヘラクレイトス以降、ロゴス(こと)は、プラトン、アウグスティヌス、啓蒙主義と西洋の哲学者にとって極めて重要な意義を持つことばであつた。

西洋においても、ときにものを先とする思想が現れる。かつて、東洋との交流のなかで生まれ南フランスに栄えたカタリ派を軸とする地中海文明もまた、ものを先にする文明であった。また、これは教えられたのであるが、スピノザはまさにものを先とする思想家であった。

西洋語について見たことは、いずれの言葉にもあてはまる。日本語には日本語に結実した智慧としての神道があるように、朝鮮語にも朝鮮語に結実した智慧としての神道があり、琉球諸語にも琉球諸語の神道がある。世界のそれぞれの言葉に、それぞれの神道がある。

それぞれの神道はたがいに認めあつて共生しなければならぬ。そのための智慧と実践が今日の課題である。固有性を深く耕し、固有性をたがいに尊ぶ生きた普遍の場を生み出すことである。言葉のなかに蓄えられてきた智慧は、それが直接の生産を土台にする生きた智慧であるかぎり、十分に掘り起こされたならば必ず通じあえる。人はわかりあえる。

## 神の道と佛の道

自らの経験日本語に照らしあわせ、日本神道を定義してきた。私には、仏教もまた身近であった。それぞれの神道を認めあうということは、神道と佛道についても言える。

道元禪師の『正法眼蔵』はその美しい文体にもかかわらず、自らの経験としてはわからないままであった。しかしこの本は手ばなせなかった。宇治上神社の近くには、桃山時代に再興された道元開祖の興聖寺があった。小さい頃から慣れ親しんだ遊びの場であり、また祖師堂のまえの石段は高校生の頃から考えごとをする場所であった。興聖寺は道元に惹かれたきっかけの一つである。また、『正法眼蔵』の「山水經」の冒頭、

而今の山水は、古佛の道現成なり。ともに法位に住して、究盡の功德を成ぜり

という言葉をも、宇治川とその周辺の風光そのものとして受けとめ、『正法眼蔵』に入っていた。

大学二回生になった一九六七年五月、臨済宗京都相国寺の在家居士の会である智勝会を知り、相国寺専門僧堂の老師に参禅、僧堂で禅の修行を始めた。日曜ごとに雲水とともに僧堂に坐った。真冬の臘八の接心では夜通しの座禅も経験した。師事した老師は、『正法眼蔵』を講本にして提唱された。西播は赤穂の寺での合宿では早朝から晩まで座禅に明け暮れた。

しかし、全学ストライキのはじまった頃に寺を離れた。そして、もう今生で僧堂で坐ることはないと思っていたが、四十五年後、元智勝会員であった人らの集いに出会い、以来毎年夏の一日、相国寺僧堂での座禅を続けている。

日本列島においては、律令制の時代より、現実の宗教は

つねに国家の支配制度の一部であった。そこにおいて神道と佛道は互いに位置づけあい、さまざまの形態をもって、いわゆる神仏習合がおこなわれてきた。

そのような歴史のなかで、鎌倉時代にはじまる新仏教、念仏を旨とする仏教、そして道元を開祖とする禅仏教は、神仏習合とはあいだを置いてきたと言われる。しかし、以上に見てきたような日本語の語る神は、むしろこの道元の教えと近いように思われる。『正法眼蔵』の「山水經」の冒頭「古仏の道」を「神の道」におきかえ

而今の山水は、神の道現成なり。ともに法位に住して、究盡の功德を成せり

としても何ら違和はない。世界の同じことを言っていると考えられる。「山川草木悉皆仏性」は佛道の言葉であるが、これもまた「山川草木悉皆神性」といえばそのまま日本神道の言葉である。

さらに道元は、主著『正法眼蔵』のなかの一卷「現成公案」のなかで、「身心脱落」について次のように言う。

仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするといふは、万法に証せらるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心、および佗己の身心をして脱落せしむるなり。

これは実に、自己が自己を脱落してことになりきったときの言葉である。道元はさらに、「もの、こと、いき」の成り立つときについて深める。『正法眼蔵』「有時」において、

時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。

とのべる。ここでいう「時」とは、まさにこの「ことが成立するとき」である。道元はさらに

眼界にあらゆる尽有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。

ともいう(同)。ものはすべて「つらなりながら」、つまり大いなることのもとにおいてあるのであり、しかも一つ一つが生き生きと時時なのである。「有時」なるとき人はことそれ自体にある。『正法眼蔵』の述べることは、「もの、こと、とき」の世界の基本構造そのものである。

道元の発心・求道はまったく内部からのものであり、さらに天童山での道元の経験は、「中国からの刺激」ではなく中国や日本という文化の制約をこえた普遍的なもので、如浄もまた、普遍的な立場から道元に法を嗣いだ。道元は自分の経験を述べるために、自身は堪能であった中国語を漢文として使うことはしなかった。中国語に堪能で

あつただけに、漢文式日本語の叙述に入り込む空白を道元は十分に認識していた。

道元は、当時の日本語の枠組みのなかに、中国語から漢字語を切り取って自己の経験に裏打ちされた意味をもって配置する、という独自の方法をあみ出した。当時の日本語の条件のなかでそれ以外になかった。「山水経」のなかの「而今の山水は、古佛の道現成なり」というこの「而今」を、他に訓読みしうる表現で言うことはできなかつた。言葉をこえた普遍性を獲得し、言葉からも自由な地点から逆に言葉を駆使した。『正法眼蔵』は、日本語の現実に立って普遍性を獲得する可能性を示すものである。道元はもまた日本語に蓄えられた智慧を、そのときに一歩深めて『正法眼蔵』としてのべたのである。その「発菩提心」において次のように言う。

衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度  
先度他のこゝろを、おこさしむるなり。自未  
得度先度他の心をおこせるちからによりて、  
われほとけとならんとおもふべからず。たと  
ひほとけになるべき功德熟して円満すべしと  
いふとも、なほめぐらして衆生の成仏得道に  
回向するなり。この心、われにあらざ、他に  
あらず、きたるにあらざといへども、この発  
心よりのち、大地を挙すればみな黄金となり、  
大海をかげばたちまちに甘露となる。これよ

りのち、土石砂礫をとる、すなわち菩提心を  
拈来するなり。水沫泡焰を参ずる、したしく  
菩提心を担来するなり。

人に「人のためにと考えて生きる」生き方を勧めていくことこそが、人間が生きるうえで意義である。人間がなにをなすべきかを端的に述べている。この言葉をよく味わいたい。非情の求道と無限の向上、この道元の生き様は、日本神道に基底のところでもすばれている。

国家政治の中の神仏習合とは別の地平で、この日本列島弧に暮らすものは、神の道と佛の道をたがいに基底で通じあうものとして受けとめ、学び、祈ってきたのである。

## あのすなおな心

このように神仏習合は自然なことであった。しかし、幕末の討幕運動は神仏分離を掲げる。それもまた理由のあることであった。

江戸時代の幕藩体制のもとで、寺は宗門改めや宗門人別帳などによって、民百姓の管理を行い、封建支配体制の末端を担っていた。したがって、討幕運動が、幕藩体制のもとにある寺から神道を切り離すことを掲げたのは、当然のことであった。江戸時代の神社は、その意味で幕

藩の支配体制から離れており、それだけに神社は、本来の神道がさまざまに生きていた。

また、徳川家康にはじまる江戸幕府は、天皇を擁して自らの権力と政治支配を確立した。幕府は朝廷に小大名なみの御料（領地）と公家領をあたえ、幕府の援助で祭司的行事と、天皇制は残した。しかし幕府は天皇が政治上の実権をもつことは許さず、朝廷を厳しい統制下に置いた。天皇は名目的な作曆、改元、叙位任官の祭司的役割を保持していたにすぎなかった。権力は封建領主としての武士、武家がにぎっていた。

このような封建幕府の時代に、歴史の要求にこたえて出てきた新しい思想こそ、一君万民の古代へ立ち返れ、という皇国思想であった。一七〇〇年代に本居宣長が説いたのは、日本国は神の国であり、神は天皇である。故に神たる天皇こそ唯一の統治者であり、その神の前では万民は平等であるということであった。天皇を実権のないものに祭りあげてきた徳川封建制に対する批判であり、反面逆であった。一君万民思想は徳川時代の封建身分制度を内部から破砕する。

人が神であるという考え方はわれわれが定義した神道のものではない。また民俗学的研究によっても、人を神とする考え方が江戸期までの民俗になかったことは実証されている。人は神の言葉を聴くものであり、あるいはまた神が人に憑いて言葉を伝えるものであるが、人は神

ではありえない。本居宣長の言説には、深い矛盾が存在している。同時に、彼をしてこのように言わしめた、封建体制の閉塞を打ち破ろうとする情念もまた、認識しなければならぬ。

そして、平田篤胤は、天皇のもとにおける人民の平等を「御国の御民」としてのべてゆく。一君万民思想のさらなる展開であった。篤胤自身は幕藩体制それ自体を否定したのではない。ただ、古の人間に託して人間の生き方を提示した。しかし、それは、江戸幕府を支えてきた儒教的、朱子学的世界観を一掃するものであるだけではなく、一君のもとにおける万民の平等という思想は、必然的にそれを抑圧する幕藩体制への批判を内包した。

平田国学は一つの大きな政治的社会的力となった。篤胤は全国に四千人を越える弟子（死後の弟子を含め）をもち、その膨大なつながりは、幕藩体制にかわる世を求める運動の基盤となった。そしてついに幕府は倒れ、明治時代となる。

倒幕に総てを託した志士たちが願ったことを、島崎藤村はその著『夜明け前』で、主人公青山半蔵の青年時代の言葉として次のように言う。

古代の人に見るようなあの直ぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分らはこの世の出発点に帰りたい。そこからもう一度この世を見直したい。

また藤村は、晩年の半蔵には「古代の人に見るようなあの素直な心」と言わせている。「あのすなおな心」こそ、島崎藤村がいまに残した貴い言葉である。封建体制を打ち破り、そのもとで押し込められてきた人の心を解き放ちたい、これが倒幕に生涯を捧げた志士たちの心であり、その彼らが願ったことこそ、「あのすなおな心」である。神社を寺から切り離し、「あのすなおな心」を世にとりもどしたい。こう考えたものたちが、倒幕に立ちあがった。

だが、明治維新の現実には国学の徒の夢を裏切っていく。これについては「いま『夜明け前』を読む」を見られたい。

これまでの考察をふまえて、改めてこの「すなおな心」定義しよう。人は、いのちの不思議に出会ったときに、身をただし心をただして、深く祈る。その神の前でのすなおさ、これが「古代の人に見るようなあのすなおな心」の基本の意味である。

そして、いのちあるものとしての人は世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということであり、その場でこそもつともいのちが響きあい輝く。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。人は語らい協働することで人になる。その人と人の素直な語らいの心こそ「あのすなおな心」のもうひとつの意味である。

「すなおな心」とは神と人、人と人の間のまことのあり方そのものなのである。そして、その心こそ、地道にこつこつと新しい人生を模索している人々の心であり、経

済第一から人間第一への時代をきりひらく人々の心である。こうして、半蔵があのと看した夢は、いまこそ正夢とするときなのである。

すなおな心とは、しかし、安易なことではない。日頃の生活と仕事のなかで習慣づいている考え方ではない。それを、もう一度見直す心である。経済を第一に考えることに慣れてしまっている日常を、改めてとらえなおす心なのでもある。

## 神の言葉を聴く

日本が国家として統一された天平の頃から平安初期にはじまり、今日まで、神社は国家の支配を受けてきた。延喜式神名帳は、当時官社に指定されていた全国の神社一覧であるが、このような官社と、官社でない地域の神社が、江戸時代までは併存してきた。

明治維新は、青山半蔵と国学の徒の夢を裏切って成立した。明治維新は、幕府体制の末端をになっていた寺を明治元年の神仏分離令で廃仏毀釈のもとに国家から切り離した。また、明治五年には修験禁止令が出され、神仏習合の修験道も禁止された。

そして今度は神社が国家に組みこまれ、国家神道となる。大きな神社には国家神道のもとに入る必然性があった。国家神道は、日本神道本来の「場をむすぶ神」を「国

家をむすぶ天皇」に置きかえることで成立した。むすぶものはあくまで神であり、人が神たることはない。この国家は近代資本主義の国家であり、日本神道の場ではない。

明治政府は神社の国家統制を強め、神社合祀令により地域の神社を国家の下に整理しようとした。南方熊楠らの民俗学者がこれに反対し、それぞれの地方でも反対の運動がなされた。その結果、大正九年、貴族院は合祀令の廃止を議決する。それまでの十数年間、全国二〇万社の中の七万社が破壊され、多くの鎮守の森が失われた。

南方熊楠の『神社合祀に関する意見』を読むと、ここで失われたものはほんとうに大きい。取りかえしがつかず、近代日本が一つの文明を根こぎにしたということがわかる。

こうして全国の神社が国家神道のもとにおかれることになった。国家神道は、国家を第一にして人を第二とし、実際には、国家の戦争に人々を動員するための役割をはたした。

そしてついにあの十五年戦争に至る。この戦争は日本の歴史において未曾有のことであった。南太平洋から東南アジア、東北アジア、中国大陸と朝鮮半島、いわば日本列島弧に住むものの祖先の地のすべてに兵を進めた。そして敗北した。

戦後体制は、天皇を「象徴」と位置づけてきた。これは「国家をむすぶ天皇」をさらに「国民をむすぶ天皇」

に置きかえたものに他ならない。天皇は、神の言葉を聴き、その言葉にしたがって、人々をむすぶためにはたらく、ということである。しかし、神道においては、天皇もまた日本語と日本神道の下にあり、神の前ですべての人は同じである。よって、ある血脈のものがそのゆえに「国民をむすぶ」はたらしきをするという考えは神道のものではない。「むすぶ」ことと「人間天皇がそれをする」ことの間にも深い矛盾が存在している。

昭和二十二年、民俗学者の折口信夫は神社本庁創立一周年記念の講演「民族教から人類教へ」のなかで、古代から天皇は人であったということを語っている。現人神の否定である。折口信夫は戦前戦後を通じて天皇が神であるという考え方はとらなかつた。それは民俗学の良心である。しかし、神社本庁当局は「この折口学説は、一参考に過ぎず、神社本庁がこの説を公認するものではない」と釈明し、国家神道復活の方向に進んだ。

こうして、戦後政治は国家神道を根底から見直すことがないままにはじまった。それに対応して、戦争責任もまた内部から問われることなく、明治維新ののちに成立した官僚制などの基礎組織はそのまま残った。そして、あれだけ「鬼畜米英を撃て」と国民を動員しておきながら、戦後は一転、対米隷属の政治となる。アメリカの核戦略の一環として地震列島に原発をいくつも作り、ついに福島核惨事に到ったのである。

第二次大戦後の米国と世界を支配してきた金融資本と軍需産業の複合体は、弱肉強食のいわゆる新自由主義をひろくゆきわたらせてきた。しかし今日、経済世界はもはや拡大するところが軍事以外にはなく、拡大を旨とする資本主義が根底からゆききづまる段階に至っている。ここからの活路をきり拓くことが求められている。

このとき、すなおな祈りの心をその根底におく日本神道は、歴史の求めに応じてゆこうとするものに対して、生きる道を指し示す。西洋近代と東洋、そして固有文化の狭間で苦しんできた近代日本の経験が、ここで力になる。日本列島弧にくらすものは、福島原発核惨事に、日本神道の原点に立ちかえれという神の言葉を聴かねばならない。そして今の世の有り様を顧みよ。このとき、今日の問題に即して日本神道の教えることは、次のようなことである。

第一に、人は、たがいに人としての尊厳を認めあい、敬い、いたわりあえ。人のさまさまな力は、けっして私のものではない。世に還してゆかねばならない。人を育て、人に支えられる世を生みださねばならない。今日の日本は、人を金儲けの資源としている。これは神道に背く。

第二に、言葉を慈しめ。人は言葉によって力をあわせて生きてきた。言葉は仕組みをもつ。新たな言葉は、その仕組に根ざして定義されねば意味が定まらない。近

代日本の言葉の多くはこの根をもたない。これでは若者の考える力が育たず、学問の根は浅く、人を動かす力も弱い。もういちど日本語を見直せ。

第三に、ものはみな共生しなければならない。いのちあるものは、互いを敬い大切にしなければならない。里山と社寺叢林とそしてそこに生きるものたちを大切にせよ。無言で立つ木々のことを聴け。金儲けを第一に動かすかぎり原発はかならずいのちを侵す。すべからくこれを廃炉にせよ。

第四に、ものみな循環する。使い捨て拡大しなければ存続し得ない現代の資本主義は終焉する。人にとって経済は、人として生きるための方法であって、目的ではない。人が人として互いに敬い協働する。人とのちの共生のためにこそ、経済はある。経済が第一のいまの世を、人が第一の世に転換せよ。

第五に、たがいの神道を尊重し、認めあって共生せよ。神のことを聴き、そして話しあえば途はひらける。国家は方法であって目的ではない。戦争をしてはならない。戦争はいのちと日々の暮らしを破壊する。まして戦争で儲けてはならない。専守防衛、戦争放棄、これをかたく守れ。

これが日本神道の教えることである。

これに対して、日本神道に背き近代の国家神道に回帰しようとする神社本庁と日本会議、それに操られるもの

私たちは、これとは真逆の政治をおこなっている。それは、官僚、財界、マスコミ、その背後の帝国アメリカ、これらが支配する旧体制の今日における姿である。

思想において、日本近代の国家神道は、日本語がたえる日本神道とは真逆のものであり、神道を語りながら神道に背いているが、実際の政治においても教えに背き、排外主義と軍事主義をあおり、それが二〇一七年の日本政治を主導している。

かつて人々は、日本神道のもとに、循環する共生の世を生きてきた。これを現代において見直し取りもどそう。こうして、閉塞した現代日本の旧体制をうち破ろう。打ち破る力は、旧来の左右の分岐を乗りこえた新しい人の台頭、これである。そして、国家を超えてたがいの固有性を尊重しあう普遍の場、そこに生きる新しい人々が、この未曾有の困難のなかから生まれる。

資本主義は行きづまり軍需産業しか利潤を生みださない。日本もまた戦争で儲けようとする世界大の資本主義の輪にとりいれられた。再び戦争に人を駆り立てるため、かつての国家神道とその体制を復活させ、それを使おうとする動きがこの間続いている。

今の日本の為政者や東電幹部には、福島原発核惨事で、周りの環境や多くの生き物、そして人々を損ね大きな傷手を負わせてしまったという、畏れの気持ちがない。神を恐れることを知らない政治である。福島原発核惨事に神の言葉を聴きとり、それをふまえてこの地点から、大きなものへの畏怖を失わない政治へと、転換してゆかねばならない。

日本神道の教えをすなおな心で聴きとり、ものみな共生し循環する新しい世をひらけ。